地方小出版 情報誌
アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

ひとり出版社　典々堂事始め

ああそうだ、長いこと忘れていたけれど、私には出したい本があったのだ。だから編集者になったのだ。

文・髙橋典子（典々堂代表）

開業のきっかけ

２０２１年１０月、緊急事態宣言は解除になったとはいえ、世間はまだ日常を取り戻していなかった。そんな不安定な時期に、私はひとり出版社を立ち上げることとなった。

ほんの数か月前まで、そんなことになるとは全く思っていなかったので、自分で決めたこととはいえ、あまりの急展開に呆然とした。

この年の９月まで、私は小さな文芸出版社に勤めていたのだが、ものすごくかいつまんで説明すると、出版不況のあおりをうけ、２４年勤めたそこを辞めることになった。

小さな出版社というのは、おおむね自転車操業であることが多い。出版点数が減ると、それまではなんとか取れていた収支のバランスが崩れてしまう。それでも月々の固定費はかかるので、どこを削るかといえば、人件費なのだった。

今となってはのんきにもほどがあると思うのだが、私はその会社を勤め上げるつもりでいた。２４年という長きに渡って勤め、それなりに責任のある仕事もしていたし、戦力になっていると自負していた。けれどそれが正しく評価されるかどうかというのは、また別の話なのだ。

社長と私、それに週３勤務のパート１人で回していた会社だったから、切るとすれば私で、そうだろうと頭では思うけれど、だからといって納得はできないし、辞めざるをない状況に仕向けられたように感じたとしても、責められないだろう。

濱松哲朗歌集『翅ある人の音楽』典々堂刊・四六判・定価（本体2500円＋税）／ISBN978-4-910738-18-5

とはいえ、生来ののんきさはここでも遺憾なく発揮されて、ほどなくして「本当にたいせつなものは何かということがわかったからいいか」と、気持ちを切り替えた。私が辞めることになって一緒に泣いてくれた人、怒ってくれた人、心配してくれた人、なんとかならないかとあれこれ骨を折ってくれた人、結局どうにもならなかったけれど、そのおかげで多くの人に支えられていたと気づけた。私は幸せ者だったのだ。

起業を決意するまで

辞めることが決まって、昼間は出勤して引継ぎなどを忙しくこなしていたが、家に帰ると夫にむかって「文芸書しか作ったことがないし、斜陽産業だし、いい歳だし、次の勤め先なんか見つからない」と、泣き言を並べていた。どう考えても、お先真っ暗だった。人の温かさを知ったことと、仕事がないこととは別の次元の話なので、いくら私でもそこまでのんきではないのだ。

すると、夫は「だったらもう、開業するしかないんじゃないの？」と言い出した。は？　何言ってんの？　今の話聞いてた？　三重苦ですよ？　なんなら女だから、四重苦ですよ？

私は、そんなことできるわけないと、その理由を並べ立てたが、夫は慌てることなく「だって、２４年で培ったノウハウがあるでしょう。人に使われるということは、今回みたいなことがまた起こるかもしれないってことだよ」と冷静に言い放った。そりゃそうだけど。そうだけど！

「出版の仕事が好きなんでしょう？」好きだよ。子供のころからの憧れの仕事だったんだから。だから辞めることになってこんなに悔しいんじゃないの。「じゃあ、今までの人脈を使って、最初はなんでもやらせていただきますって頭を下げて回るんだよ。自分のためなら、好きな仕事のためならできるでしょう」

出版社をやる？　私が？　できる？「最初から、順風満帆とはいかないと思うよ。儲けだって出ないどころか持ち出しだろうし。でも、明日の米に困る生活じゃないんだから、やれるだけやってみたらいいんじゃないの。だめだったら、そのときはそのときだよ」夫は私の背中を押してくれた。

そ、そうかな。やれるかな。やれるかも…。単純である。私はのんき者だが、うっかり者でもあるのだ。それくらいじゃなきゃ、このご時世に出版社をやろうとは思わない。

うん、そうだ。本作りのノウハウはある。印刷所、デザイナー、製本所、取引先とも交渉できる。事務仕事全般もやっていたし、経理もできる。出版取次業務だってやれる。謹呈の発送作業もできる。だって、あの会社を切り盛りしていたのは私だ。２４年間、真面目に勤めてきた。著者とも取引先とも誠実に真心こめて仕事をしてきた。よおーし、絶対にいい本を作ってやるぞ！

ああそうだ、長いこと忘れていたけれど、私には出したい本があったのだ。だから編集者になったのだ。

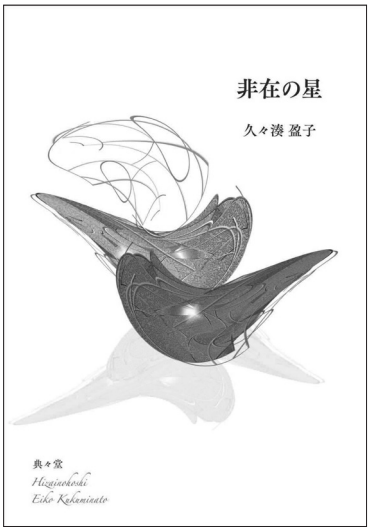
開業に向けて

開業すると決めたときに読んだのが、西山雅子編『“ひとり出版社”という働き方』（河出書房新社）という本だった。数々の個性あるひとり出版社社主が登場し、その志の高さに打ちひしがれながら、それでも多くの勇気をもらった。みんな試行錯誤しながら、なんとかいい本を世に送り出そうとしていた。金儲けをしようと思っている人は、出版社なんかやらない。本が好きで、こんな本があったらいいな、読んでもらいたいな、届けたいなと思って本を作るのだ。売れたら嬉しいけれど、売るための本ではない。

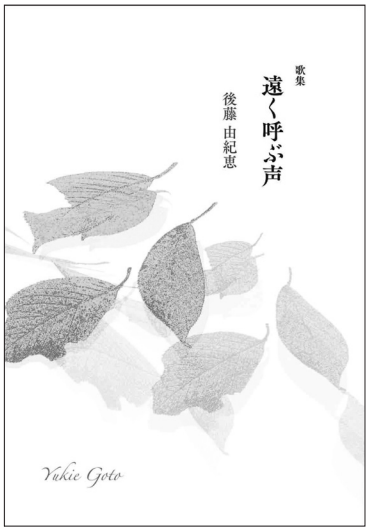
開業するためにやることはごまんとあるが、まずは屋号だろう。屋号は会社の顔だ。それこそ上記の本には、屋号に込めた思いなども書かれていて、それがどれも素晴らしく、超えられる気がしない。もちろん超える必要はないけれど、とにかく思いつく名前をノートに書き散らした。新聞や本を読みながら、いい言葉を探し、ネット検索をすると、すでにレストランの名前だったり、個人のブログのタイトルだったり、果ては書店や出版社の社名に使われていることもあって、がっかりする。世の中にはたくさんの書店や版元があるんだなぁと妙に納得したりした。

ところで、私の下の名前は「典子」だ。子供のころは、ありふれていてつまらない名前だと思っていて（お父さんお母さんごめんなさい）、「子」がつかない名前に憧れた。しかし、大人になって「典」という字は、机の上に本が載っている会意文字であると知った。まさに本好きな私のためにあるような文字ではないかと、コロッと気持ちが変わり、それ以来、人にもこの由来を説明するようになった。またまた単純である。

そうか、出版社なんだから「典」を使って屋号を考えたらいいんじゃない、とあれこれ書き出した中に「典々堂」があった。ネット検索をしても何も引っかからなかったし、なにより「てんてんどう」という弾むような読みが気に入った。てんてんどう、てんてんどう。深い意味はないけれど、それが単純な私にはちょうどいい気がした。



『非在の星』久々湊　盈子著／典々堂刊／四六判・定価（本体3000円＋税）／ISBN978-4-910738-00-0



『遠く呼ぶ声』後藤　由紀恵著／典々堂刊／四六判・定価（本体2700円＋税）／ISBN978-4-910738-19-2

いよいよ刊行がはじまる

私が前職でおもに手掛けていたのは短歌の歌集だったので、開業してから今までに出版したのもほぼ歌集だ。近年、短歌ブームと言われており、大型書店には、短歌専門の棚ができているところもあるけれど、それでもニッチな分野であることに変わりはない。道のりは厳しいがやるしかない。

そこで、私が出したい歌集とはどんな歌集なのか考えてみる。例えば作者の世界観が確立していて、ぐいぐいと読み進めてしまうような歌集。短歌総合誌や結社誌に発表された作品を、まとめて読みたいと思わせてくれる歌人の歌集。世間にまだ知られていないけれど、ここにこんなすごい歌詠みがいますよ！　と読者に届けたい歌集。いろいろな歌集を出してみたい。

じつはすでに出したい歌集はいくつもあった。前職のときに出版を打診したけれど断られた歌人に再度手紙を書いて、今度こそ出版させてほしいとお願いしたり、SNSで歌集を出したいと呟いている人に「ぜひ典々堂から出しませんか」と口説いてみたりした。もちろん、基本的にそれらはお断りされるのであるが、そこでめげていてはだめだ。典々堂は私ひとりしかいないのだから、私がなんとかしなければ、むこうから原稿がやってくることなどないのだ。たいへんだけれど楽しいとはこういうことか。暇があれば（というより暇だらけだ）手紙を書いていた。

そうして完成した歌集のひとつが、濱松哲朗歌集『翅ある人の音楽』だ。濱松さんとは前職からの知り合いで、実力はあり、周囲から歌集出版を熱望されていたが、まだ出ていないことは知っていた。そんな濱松さんの「歌集を出したい…」というX（旧Twitter）でのつぶやきをたまたまキャッチした私は、すぐに「典々堂から歌集を出しませんか？」とDMを送った。このときの私の素早い行動を我ながら褒めたい。のんき者でもやるときはやるのだ。

濱松さんに、当時の本当の気持ちを聞いたことはないけれど、新興のひとり出版社からのオファーを受けてくれたことには、今でも感謝でいっぱいだ。その後の活躍をみると、もっと大きな版元から出した方が彼にとってはよかったのではないかと思うこともある。しかし、本文のフォントや体裁も相談して決め、装幀家も交えて紙や造本についてもよく話し合い、何度も校正を出し、納得のいく本が出来たのは、小回りの利くひとり出版社ならではではなかったかという気持ちもある。

刊行を果たして

結果として『翅ある人の音楽』は、とても恵まれた歌集となった。内容と造本が素晴らしいのはもちろん、予約段階でたくさんの注文が入り、紀伊國屋書店では短期間ではあるが平積みにしてもらった。自分の作った本が紀伊國屋書店に並んでいるのを見たときは、飛び上がるくらい嬉しかった。書店に乞われて、著者と二人でサイン本を作りにも行った。まさか開業から１年半でこんな景色が見られるとは思ってもみなかった。編集者を志していた中学生の自分に「時間はかかったけど、ここまできたよ」と伝えたい。

その後もコンスタントに注文は続き、あちこちで取り上げられるようにもなった。いい本が正当に評価されていることが心底嬉しい。

刊行から半年ほどして、縁あって私の地元の書店でフェアをやってもらったり、濱松さんと歌集の栞文の執筆者である高瀬隼子さん（芥川賞作家）との対談が舞い込んだり、歌集の批評会をやったりとその輪はどんどん広がっている。

小さな出版社でも、良本を作り、人との縁をたいせつに、地域に根差した活動をしていけば、まだまだ生き残っていけるのではないかと希望を持っている。本は人と人とをつなぐ素晴らしいコンテンツなのだと改めて実感しているところだ。

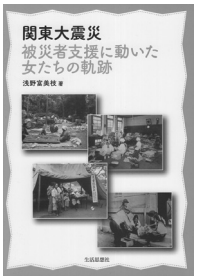
＊

（たかはし　のりこ／典々堂代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『関東大震災　被災者支援に動いた女たちの軌跡』●浅野冨美枝 著



はじめに、能登半島地震により犠牲となられた方々の御冥福をお祈りし、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

関東大震災から100年を迎え、様々な図書が刊行され、雑誌の特集が組まれているが、女学校に残された手記や、平塚らいてうなど女性によって書かれた体験記、自治体・地域資料を丹念に掘り起こし、女性の被災状況、女性による被災支援活動とその後についてジェンダーの視点で描いたものは、本書をおいてほかにないのではなかろうか。大震災における女性固有の特徴は、遊郭の娼妓や紡績工場の女工など拘束状態下の集団犠牲であったという。また、失業率は男の倍以上、性被害も多発し、夫婦片方になった者の結婚紹介事情にも明らかな男女差が生じた。しかし、被災者支援にいち早く動いたのは女性たちであった。愛国婦人会や全関西婦人連合会、日本基督教婦人矯風会などのキリスト教関係団体、東京女子師範学校ほかの女学校と同窓会による炊き出し、児童相談、妊産婦救護、支援物資の調達、義援金の募集といった活動は目覚ましいものがあった。しかもこれら自主的に活動を始めた女性団体は、東京連合婦人会、横浜連合婦人会として大同団結した。後に戦争協力に利用された負の側面があることにも目を背けてはならないが、ネットワークを形成し、地域防災の拠点として被災者支援を担ったことは、現今の災害対策で大いに学ぶべき教訓である。

（飯澤文夫）

◆ 1300円・Ａ５判・113頁・**生活思想社**・東京・202312刊・ISBN9784916112330

『「砂の器」と木次線』●村田英治 著

松本清張の名作『砂の器』。1974年には映画が作られるなど度々映像化されています。物語の舞台は、東京の蒲田・秋田の羽後亀田など全国に及びますが、その中でも重要な場所のひとつが島根県の亀嵩です。本書はそんな亀嵩駅のある木次線の沿線と、1974年の映画『砂の器』のロケについてまとめたものです。第１章では映画内での亀嵩について触れています。実は映画に登場した亀嵩駅は、近隣にある出雲八代駅や八川駅で撮られた画像を組み合わせたものでした。亀嵩駅は当時駅構内にそば店があり、イメージとそぐわなかったからのようで、ロケ隊のこだわりが感じられます。第２章ではなぜ駅構内にそば店があったのかなど、1970年代の木次線の置かれた状況にも触れています。そして第３章では、物語の舞台になぜ亀嵩の地が選ばれたのかにまでも考察が及んでいます。

しかし本書の白眉は第４章1974年の映画『砂の器』ロケ隊が島根に訪れた際の記録にあるでしょう。監督の野村芳太郎と主演の丹波哲郎が地元の青年大会の前夜祭であいさつをしたり、緒形拳が（出雲弁の練習を兼ねて？）地元の家庭に三晩も訪れ酒を酌み交わすなど、今では考えられないおおらかな空気でした。ロケ隊を迎える地元の人たちの盛り上がりや、ロケ隊の要求に応えるためのバタバタなど、関係者の多くが懐かしく当時のことを語ってくれていて、木次線の沿線には今も『砂の器』の記録と記憶が強く残されていることが伝わってきます。（副隊長）

◆ 1800円・四六判・306頁・**ハーベスト出版**・島根・202312刊・ISBN9784864564960

『平安貴族の和歌に込めた思い ―菅原道真・藤原道長・紫式部・清少納言・白河天皇・源頼政』●今井雅晴 著

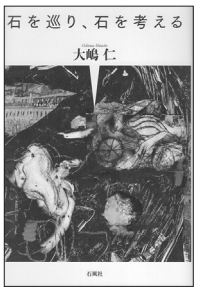
平安時代の貴族にとって和歌は教養であると同時に出世の手段でもあり、さらに恋の駆け引きを楽しんだり、家族や友を思いやるなど、人の心を表現する大切なコミュニケーションツールだった。平安時代から鎌倉時代にかけて「歌合（うたあわせ）」という和歌の会がしきりに行われていたが、一方で日常的な交流や宴会の席で気軽に詠まれ、そのまま記録されなかった”詠み捨て”と呼ばれる歌も多い。

本書は当時活躍した貴族たちが、いかに自分の思いを和歌に込めたかを探ったもので、菅原道真・藤原道長・紫式部・清少納言・白河天皇・源頼政・慈円・土御門通親の８人を取り上げている。著者は詠み捨てこそが貴重な史料であり、藤原道長が自身の栄華を誇ったとされる有名な「満月の歌」も実は詠み捨てであるべき歌だったという。この歌で高慢なイメージを持たれている道長だが、単に娘３人が中宮になったという個人的な喜びを詠んだだけだったのに、権力争いで道長に複雑な思いを抱いていた小野宮実資がこの歌をわざわざ拾い、自著に残して不満を表現したと新しい見解を示している。

また紫式部と清少納言は対立関係にあった、源頼政は和歌が得意なだけで、武将としては無能だった、としている。仏教界では和歌を詠むのは快く思われていなかったが、折々の思いを込めた和歌を4000首以上残した慈円、現存する歌は少ないが、和歌によって貴族たちと通じ合おうと努力した白河天皇の思いも探る。短歌ブームの昨今、こんなルーツを辿るのも興味深い。（Y）

◆ 1800円・Ｂ６判・171頁・**自照社**・滋賀・202312刊・ISBN9784910494272

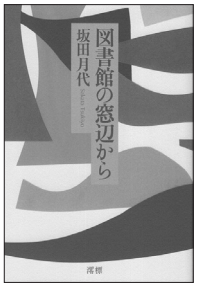
『石を巡り、石を考える』●大嶋仁 著



比較文学者による石と岩をめぐる思索の旅の記録。フランス留学時代には、スペイン西北部、大西洋に面したガリシア地方を訪れ、サンティアゴという古い町を旅して他のスペインの都市とは違う石造の建造物の表情に気づく。ガリシアの石はざらざらしていて磨かれていない、荒削りなままで化粧をしていない、それが多湿な気候のために黒ずんでいる。そして道々にたつイエスの石像もまたざらざらしたガリシアの石だ…。一方でガリシアには、その土地ならではという文学がないとも書く。だからつい石の方に目がいってしまうのだ、と。パリで教えていた時代には、人口都市に鬱屈し疲れ果て、「未知への郷愁」に突き動かされるようにしてアイルランドに旅立った。ガリシア同様ケルトの土地であり、ここでも著者の眼は素朴な石で造られた古い聖堂に向けられる。その石を「神さびた石」と表現し、スコットランドの詩人ケネス・ホワイトの、「何にもまして聖なる　硬くて尖った、年老いた　あらゆる天候に耐えてきた石」という詩の一節が想起される。著者の旅の記録はさらにインカの石へ、日本の対馬の石へと続き、さらには宮沢賢治やロジェ・カイヨワの、そしてノヴァーリスやレヴィ＝ストロースの石へと拡がる。こうしてみていくと著者にとって石や岩とは、その土地の古い自然ということを超えて、その土地の「身体」あるいは地霊のようなものであり、文学や哲学、科学が陥りがちなイデオロギーあるいは観念的同一性とは対極にある「詩」であるということがわかる。（N）

◆ 2000円・四六判・199頁・**石風社**・福岡・202312刊・ISBN9784883443239

『図書館の窓辺から』●坂田月代 著



1970年代から2000年代までの29年間、兵庫県の商業高校で学校司書として働き、労働組合活動にも取り組んだ足跡を、単なる思い出話としてではなく、歴史の語り部として、誰もが持つやりがいや共感を引き出すものにしたいとの決意から綴ったものである。

学校図書館は学校教育に欠くことのできない基礎設備（学校図書館法）でありながら、学校司書の配置は努力目標にとどまっている。兵庫県が早い時期に学校司書を置いたことは評価に値する。だが、身分は教員でも職員でもない実習助手で、待遇は役割に見合ったものではなく、教員や管理職から疎んじられることも多く、悔しい思いをし続けてきた。図書館は４教室分、蔵書は３万冊を越えていたが、生徒の利用は、昼食後の休憩か著者が磨き上げたトイレの使用に来るくらいであった。そうした環境下で使命感を燃やし、掲示板に「心のオアシス―Ａ商図書館」とキャッチコピーを貼り付けて生徒と向き合う。修学旅行に参加しない生徒は図書館で自習となることから、絵本、学習向け歴史マンガ、男女交際や性交についての本も並べ、生徒の本への関心を呼び覚ました。それは周辺高校図書館の利用スタイルとして広まっていく。楽しみや喜びをもたらしてくれる生徒たちがいる限り働き続けたと思っていたが、次第に学校内での孤立感が深まり、早期退職の道を選ぶ。学校司書が正しく認知されない内実を語る終章は痛切である。（飯澤文夫）

◆ 2000円・四六判・443頁・**澪標**・大阪・202311刊・ISBN9784860785772

『淡海妖怪拾遺 ―淡海文庫７１』●杉原正樹 著

地域情報紙の編集をするようになった著者は、ある朝、柳田國男の『妖怪談義』の一節に触発されて、「これからは妖怪だ！」と思ったのだそう。柳田は、妖怪は出る場所が決まっているが幽霊は百里も遠くへ逃げても追いかけてくる、と書いている。ならば淡海（おうみ）にしか出没しない妖怪もいるだろう、江戸の河童と淡海の河童は、出没理由が違うかもしれない…特に民俗学と縁があるわけでもない著者の、淡海妖怪拾遺はそうやって始まった。確かに本書に拾われた妖怪たちは、淡海独自のものが多いようだ。一番知られているのは「三上山の大百足」だろう。別名「近江富士」とも呼ばれる三上山にはかつて大百足が棲みつき周囲に害をなしていた。これを退治したのは、平将門追討でも名を馳せた藤原秀郷である。

また、淡海に現れる怪火は、時に「蜘蛛火」と呼ばれる明智光秀の人魂であり、時に「亡霊子（ぼうこ）」と名のつく、本能寺の変の折に安土城で命を落とした女や子どもたちの魂だ。興味深いのは、妖怪譚の背後に正史にはない歴史の重なりを見ている著者の視点である。藤原秀郷に退治された大百足を筆頭に、源頼光に滅ぼされた酒呑童子、坂上田村麻呂に討伐された鈴鹿の大嶽丸など英雄に滅ぼされた鬼や怪物たちはヤマトの王権に平定されたまつろわぬ地方神であり、さらには、例えば、全国でも安曇川（あどがわ）流域にのみ伝わる筏流しの守護神「思子淵（しこぶち）」神の河童退治の言い伝えは、地域間の勢力争いの構図と重なり合うのである。（U）

◆ 1500円・四六判・206頁・**サンライズ出版**・滋賀・202312刊・ISBN9784883258017

地方小出版 流通センター　ジャンル別 新刊案内

2023年12月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆**ｋａｐｐｏ**　ｖｏｌ．１２７　２０２４年１月号　プレスアート編　298mm×230mm　119頁　８００円　プレスアート　［宮城］　978-4-503-22995-3　23/12

◆**Ｓ－ｓｔｙｌｅ**　１２　ｖｏｌ．７０８　プレスアート編　280mm×210mm　112頁　６００円　プレスアート　［宮城］　978-4-503-22998-4　23/12

◆**Ｓ－ｓｔｙｌｅ**　０１　ｖｏｌ．７０９　プレスアート編　280mm×210mm　128頁　６００円　プレスアート　［宮城］　978-4-503-23009-6　24/01

◆**ＧＲＥＥＮ　ＲＥＰＯＲＴ**　５２８　２０２３年１２月号　廣瀬　仁編　Ａ４　191頁　２８００円　地域環境ネット　［埼玉］　978-4-909864-60-4　23/12

◆**響き合う街で**　Ｎｏ．１０７　２０２３年１１月号　やどかり出版編　Ｂ５　66頁　１２００円　やどかり出版　［埼玉］　978-4-503-23002-7　23/11

◆**かまくら春秋**　Ｎｏ．６４３　２０２３年１１月号　伊藤　玄二郎編　Ｂ６　107頁　３２７円　かまくら春秋社　［神奈川］　978-4-7740-0886-8　23/11

◆**ＡＸＩＳ**　Ｖｏｌ．２２７　２０２４年２月号　徳山　弘基編　297mm×225mm　128頁　１６３６円　アクシス　［東京］　978-4-503-23012-6　24/02

◆**山岳修験**　第７２号　日本山岳修験学会編　Ｂ５　96頁　２５００円　岩田書院　［東京］　978-4-503-23005-8　23/11

◆**地方史研究**　第４２６号　地方史研究協議会編　Ａ５　176頁　１１４３円　岩田書院　［東京］　978-4-86602-876-7　23/12

◆**子どもと読書**　４６３号　２０２４年１・２月号　親子読書地域文庫全国連絡会編　Ａ５　40頁　５０９円　親子読書地域文庫全国連絡会　［東京］　978-4-907376-66-6　23/12

◆**月刊終活**　２８０　２０２４年１月号　吉住　哲編　Ａ４　84頁　１５００円　鎌倉新書　［東京］　978-4-503-23013-3　24/01

◆**月刊住職**　Ｎｏ．３０１　２０２３年１２月号　矢澤　澄道編　Ａ５　167頁　１５４６円　興山舎　［東京］　978-4-910408-33-0　23/12

◆**月刊住職**　Ｎｏ．３０２　２０２４年１月号　矢澤　澄道編　Ａ５　175頁　１５４６円　興山舎　［東京］　978-4-910408-37-8　24/01

◆**子どもの文化**　Ｎｏ．６２７　２０２４年１月号　片岡　輝編　Ａ５　47頁　２９０円　子どもの文化研究所　［東京］　978-4-503-23010-2　24/01

◆**ｔｈｅ座**　Ｎｏ．１１９　高橋　彩子編　Ｂ５　32頁　１０９１円　こまつ座　［東京］　978-4-503-22997-7　23/11

◆**セセデ**　ｖｏｌ．７５４　２０２４年１月号　朝鮮青年社編　Ａ４　47頁　４８２円　朝鮮青年社　［東京］　978-4-503-23011-9　24/01

◆**東京かわら版**　Ｎｏ．６０７　２０２４年１月号　佐藤　友美編　203mm×110mm　170頁　６３６円　東京かわら版　［東京］　978-4-910085-43-2　23/12

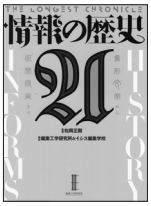
◆**俳句四季**　Ｎｏ．５５７　２０２

売行良好書

期間：2023年12月15日～2024年1月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『朝、空が見えます』1700円・ナナロク社　(2)『私が諸島である』2300円・書肆侃侃房　(3)『情報の歴史２１』6800円・編集工学研究所　(4)『渡辺京二・武田修志博幸往復書簡集』2200円・弦書房　(5)『道産子たちの沖縄戦記　あゝ沖縄』2700円・かりん舎　(6)『出雲王国と天皇政権』2250円・大元出版　(7)『日本産化石図鑑　採集と標本の作り方』2000円・南方新社　(8)『となりの谷川俊太郎』1454円・ポエムピース　(9)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(10)『起きられない朝のための短歌入門』1700円・書肆侃侃房　(11)『中村哲　思索と行動「ペシャワール会報」現地活動報告集成「上」１９８３―２００１』2700円・忘羊社　(12)『利尻島から流れ流れて本屋になった』1700円・寿郎社　(13)『「寝た子」はネットで起こされる！？』1500円・福岡県人権研究所



［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『道産子たちの沖縄戦記　あゝ沖縄』2700円・かりん舎　(2)『「砂の器」と木次線』1800円・ハーベスト出版　(3)『越前 若狭　武将たちの戦国』1500円・岩田書院　(4)『新装版 奥武蔵登山詳細図 全130コース』900円・吉備人出版　(5)『渡辺京二 武田修志博幸往復書簡集』2200円・弦書房　(6)『シベリア鉄道　三度目の正直』2000円・１７出版　(7)『さっぽろ野鳥観察手帖　改訂版』2000円・亜璃西社　(8)『世界港湾史』3600円・亜璃西社　(9)『サルタ彦大神と竜』2000円・大元出版　(10)『明治維新と西郷隆盛』2130円・大元出版　(11)『会報「民ヲ親ニス」第１０号』2000円・不知火書房　(12)『調査されるという迷惑』1000円・みずのわ出版　(13)『ジソウのお仕事　データ改訂版』1800円・フェミックス　(14)『公民館のしあさって』2200円・ボーダーインク　(15)『新装版　江戸という幻景』1800円・弦書房　(16)『希望の一滴』1500円・西日本新聞社　(17)『山頭火百句』800円・創風社出版

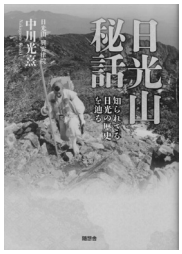
以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　Ｘ（旧ツイッター）公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼１月１日に発生した能登半島地震では多くの方々が亡くなりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。また被災された方々にはお見舞いを申し上げます。現地の書店さんでは棚からの書籍の落下、破損が複数発生しているとのことです。取次の関係者もすぐに現場に入り、破損書籍の処分と再発注処理を行うなど、現地書店の復旧作業を支援されているということです。

▼１月15日からジュンク堂書店池袋本店にて**【首都圏出版人懇談会フェア 首都圏と福島の各地で郷土の情報を発信し続ける出版社たち】**開催中です。２月18日（日）まで。

参加出版社は夢工房（神奈川）、歴史春秋社（福島）、さきたま出版会（埼玉）、まつやま書房（埼玉）、随想舎（栃木）、埼玉新聞社（埼玉）、たけしま出版（千葉）、有隣堂（神奈川）。出品書籍は【ほっかいどうサムライ伝 流れる星の如く、北辺の地へ】（歴史春秋社）、【日光山秘話】（随想舎）、【渋沢栄一の深谷】（さきたま出版会）、【一揆の作法と竹槍席旗】（埼玉新聞社）、【相模湾 海の不思議】（夢工房）、【横浜 鉄道と都市の150年】（有隣堂）、【銚子の自然史】（たけしま出版）、【埼玉ヒストリア探訪　古利根川奇譚】（まつやま書房）等々となります。首都圏出版人懇談会は1980年に産声を上げ、今年で24年目。



地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。